

第21回ワイルド学会要旨

研究発表

穴としての肖像画

—『W. H氏の肖像』によるメタ・ゲイ批評—

鈴木 英明

(山脇学園短期大学講師)

レズビアン&ゲイ・スタディーズが近年活発化しているなか、Ed Cohen, Jonathan Dollimore, Alan Sinfield らによって、ワイルドのホモセクシュアリティにも新たな光が当てられるようになった。だが、注目すべきは、今日「ゲイ批評」とよばれる試みを、すでにワイルド自身が『W. H氏の肖像』において実践しているということである。『W. H氏の肖像』は、W. H氏=ウィリー・ヒューズ説(少年非僞に対するシェイクスピアの同性愛的欲望)を証明しようとする三人の登場人物が織り成す物語である。つまり、「ゲイ批評」は、あくまでもフィクションという枠の中で実践されているのだ。この事実と、物語において「ゲイ批評」が最終的に失敗しているということを考え合わせると、『W. H氏の肖像』を、「ゲイ批評」に対する批評、すなわち「メタ・ゲイ批評」として読むことが可能となる。ワイルドは、単にホモセクシュアリティを表象しようとしたのではなく、ホモセクシュアリティと表象との関係を主題化しているのである。今回の発表では、『W. H氏の肖像』における表象のポリティクスを分析し、さらに、そうしたポリティクスと女性性 femininity との関わりを考察した。

この小説の三人の登場人物(シ ril, アースキン, 話者)が証明しようとするウィリー・ヒューズ説は、シェイクスピアの同性愛的欲望が『ソネット集』において「審美化」され「脱性化」されたかたちで存在する、と主張するものである。そうした主張は、『ソネット集』における生殖のメタファ(ネオ・プラトニズム)によって裏書きされている。ワイルドは、ネオ・プラトニズムによって「昇華」され「審美化」された同性愛的欲望を『ソネット集』の中に読み取る登場人物を通して、自らの同性愛的欲望を「芸術化」したのだ、とひとまずはいえるだろう。しかし、最も重要な点は、『ソネット集』を対象とする「ゲイ批評」がこの小説において失敗しているということである。つまり、ウィリー・ヒューズ説が証明不可能となることによって、ネオ・プラトニズムによる同性愛的欲望の審美化も同時に挫折しているということだ。ウィリー・ヒューズの非在は、ウィリー・ヒューズ説という証明体系に開いた穴であるといえる。ここで、贋作である肖像画の逆説的

なステイタスが問題となる。この肖像画は、ウィリー・ヒューズ説という証明体系に開いた穴を埋めるものだが、その一方で、贋作であるがゆえにかえってこの穴を際立たせてしまうものでもある。この肖像画は、同性愛的欲望を審美化して表象しようとする「ゲイ批評」を保証するはずのものであると同時に、そうした「ゲイ批評」の失敗を印づけるもの、つまり、この穴が決して埋められない空虚であることを示す形象でもあるのだ。ワイルドはこの小説において、同性愛的欲望を表象不可能なもの（空虚＝穴としての肖像画）として表象しているのである。

Rita Felski や Elaine Showalter らは、世紀末の、男性同性愛を示唆する審美的言説は女性を抑圧、周縁化するものであったと主張している。確かに『W. H氏の肖像』においても、二人の女性登場人物（画家の妻とアースキンの母親）は脇役にすぎず、周縁的な人物として描かれている。しかし、穴としての肖像画と二人の女性との関わり方を仔細に分析すると、男性同性愛と女性性との関係が両義的なものであることが露呈する。画家の妻は、夫の意に反して肖像画が贋作であることをアースキンに告げる。つまり、この女性のおかげで、肖像画はウィリー・ヒューズ説における穴として存在することになったのである。画家の妻によって、男性の同性愛的欲望は表象不可能なものとして表象されたのだ。一方、アースキンの母親は、画家の妻とは反対の働きをしているという点で重要な人物である。アースキンは、死ぬ間際に話者に送った手紙の一節で、真実は「血にまみれて (stained with the blood)」話者のところにやってくる、と書いている。『W. H氏の肖像』の1889年の版において、シリルが拳銃で自殺した際に飛び散った血が肖像画の額縁にかかっていたという記述が存在することを考慮に入れると、「血にまみれて」という表現から強烈なリアリティを感受できる。だが、注目すべきは、肖像画がアースキンの遺言によって話者に手渡されるときには、男性の血の代わりを務めるかのように、アースキンの母親の涙が話者の手に落ちているということである。これは、男性の同性愛的欲望を喚起する血が、母性愛を示す透明な涙によって「浄化」されていることを示唆している。ここには、男性同性愛を、異性愛を土台とする「家庭」というイデオロギーの中に回収しようとする動きが読み取れるのだ。以上のように、『W. H氏の肖像』における二人の女性の機能は相反するものであることがわかる。男性同性愛を表象不可能なものとして表象するこの小説においては、女性性は、男性同性愛と矛盾した、両義的な関係を結んでいるのである。